



ふくし・マイスター

地域に根ざし、世界を目ざす。—Center of Community—

先輩「ふくし・マイスター」から学ぶ「ふつうの・くらしの・しあわせ」の実践例

本学は、全学的に持続可能な「ふくし社会」を担う「ふくし・マイスター」の養成に取り組んでいます。全学教育センター地域志向科目「知多半島のふくし」（担当：全学教育センター佐藤大介講師）の授業内で実施される「COCデイ」は、大学が位置する知多半島をはじめとする地域の課題解決に取り組む方々を講師に迎え、地域の現状や課題に対する理解を深めます。2023年度は、国際福祉開発学部*の佐藤慎一学部長とともに、地域社会の中で活躍する卒業生をお招きし、クロストークを開催、3キャンパスから対面・Zoomを合わせて約600名の学生が受講しました。*2024年度より国際学部名称変更

■クロストーク「地域との関わりを通じて考える大切なこと」

山本 由梨子 氏（日米草の根交流コーディネータ）

*アメリカ合衆国よりZoomで参加

高橋 康祐 氏（東海市役所 職員）

新堀 亮 氏（イマドキヒャクショウ）

丹羽 俊作 氏（草の根ささえあいプロジェクト）

進行 国際福祉開発学部 佐藤 慎一 教授



クロストークでは講師4名（国際福祉開発学部卒業生）がそれぞれに現在地域社会の中でどのような活動をしているかを中心に、在学中の活動で工夫した点や苦労した点を共有しあいながら、現役学生に向けて学習、生活、取組のヒントとなる経験やアドバイスを贈りました。興味をもった事柄に積極的に関わることで、新しい出会いを得ることで自分の関心を深めることができた経験を実際の卒業生から聞き、学生が現在の自分と将来のイメージを重ね合わせ考える機会となりました。海外からのZoom接続を行うなど、対面と遠隔を効果的に活用した講義となりました。

地域連携教育・多職種連携教育科目「ふくしフィールドワーク実践」

～知多半島の地域課題を通して多職種・多学部で学びあう体験学習の場～

「ふくしフィールドワーク実践」では、フィールドワーク、ワークショップなど実践的な授業手法を中心に地域の様々な取組・課題に触れ主体的に学びます。この科目の特徴は、地域社会での体験学習を重視し、専門の異なる学部の学生がグループで学びあうこと、地域の様々な関係者との出会いの中で多職種や多分野の連携を学ぶことです。「事前学習、フィールドワーク、事後学習」を集中的に展開して学びを深める中で、異なる学部同士の学生が互いの知識を融合させ、課題解決に取り組みました。2023年度は、新たに1クラス加え4クラスを開講しました。

「ふくしフィールドワーク実践（東海クラス）」では、社会福祉学部・国際福祉開発学部・経済学部の学生が「地域包括ケアのまちづくり」をテーマに学びました。2日間のフィールドワークでは、知多半島にあるNPO法人などを8か所めぐり、実際に活動に携わる方から地域の暮らしを自分たちで良くしようとする方法、活動についてリアルな実態を聞くことができました。

受講した学生は、「さまざまな人や団体が協働することで、行政だけでは実現できない福祉サービスを創りだせることに気づいた」、「将来自分も地域でできることを活かしてまちづくりに関わっていききたい」など、知多半島のさまざまな団体の実践事例から得られた学びをふりかえりました。



地域に根ざし、世界を目ざす
「ふくし」の学びを伝えよう！

ふくしAWARDは、「地域に根ざし、世界を目ざす『ふくし』の学びを伝えよう！」をテーマに、学生が正課内外の地域活動を通して学んだことや考察したこと、授業や個人の関心により調査したことなどを発表するプレゼンテーションコンテストです。2023年度は、応募32作品の中から、最終審査に残った英語部門3作品、日本語部門4作品のプレゼンテーションが1/27におこなわれ各賞が選出されました。全学教育センター長の野尻紀恵教授は、総評にて「本学らしい発表が揃っていた。発表の一つ一つが社会課題や世界中の課題をなんとかしたいという思いからスタートしており、思いだけではなく、現地で実際にやってみたこと、調べてみたこと、その結果を分析している素晴らしい内容ばかりだった」とコメントし、学生に対して、今後の学修にもつなげてほしいとエールを贈りました。



知多半島で学び、それぞれの地域で活躍する「ふくし・マイスター」

日本福祉大学は、地域に根ざし、世界をめざす「ふくしの総合大学」として、知多半島の関係自治体や課題解決に取り組む地域関係者とともに、「持続可能な『ふくし社会』を担う『ふくし・マイスター』の養成」に取り組んでいます。2023年度は、806名（前期卒業生を含む）が「ふくし・マイスター」として認定を受けました。

学位記授与式では、国際福祉開発学部の山本彩加さんが代表学生として原田正樹学長から修了証が授与されました。これまでに4000名以上の卒業生が「ふくし・マイスター」として、知多半島での学びを活かし、それぞれの地域で貢献・活躍しています。

卒業までに地域志向科目10科目20単位以上

+

毎年度リフレクション（ふりかえり）を実施



ふくし・マイスター

「ふくし・マイスター」とは、地域の課題を理解するとともに、生涯を通して地域と関わりながら暮らす市民としての基礎力、地域課題を見据える「ふくし」の視点を身に付け、ボランティア精神とリーダーシップを発揮して「身をもって」地域課題の解決に取り組むことができる人のことです。

ぎふCOC+事業の取り組み

～プロジェクト実践ワークショップ「多世代交流」をテーマに企画から運営まで体験！～

日本福祉大学は、岐阜県へのU・Iターン就職促進等による同圏域の地方創生を図る「ぎふCOC+事業推進コンソーシアム」を構成しており、協定に基づき、共通プログラムや本学独自の取組を展開しています。

2024年2月2日、10日、3月9日の3日間の日程で、岐阜県で福祉事業所を展開する社会福祉法人新生会と連携し、地域課題とキャリア支援のニーズをマッチングした独自企画「プロジェクト実践ワークショップ」を企画しました。同企画には、学部や学年が異なる8名の学生、教職員8名が参加し、イベントを展開しました。

※企画には日本福祉大学後援会にも援助をいただきました。

初日は、現地フィールドワークとして岐阜シティータワー43にあるサンビレッジ岐阜を訪れ、新生会の職員・利用者さんだけでなく、ビル管理会社、地域コミュニティの関係者の話を聞き、複合的な関係者のニーズ把握を行いました。その後、企画実施に向けて聞き取った課題をグループでまとめ企画内容を繰り返し練り、多世代交流をテーマに「さんさんるんるん春祭り」を企画・運営することとなりました。イベント当日は、地域の放課後等デイに通う子どもたちやデイサービスの利用者、新生会職員の家族など70名以上が参加し、参加者は学生らが企画したスタンプラリーやミニゲームを通して交流を楽しみました。

“地域の場”でさまざまな協力を得ながら企画を実践できたことでキャンパス内では得られない新鮮な学びを経験することができました。



学生が制作したチラシ
職員さんに好評でした！

東浦町、阿久比町、常滑市との連携協定を締結

日本福祉大学は以下の通り、各自治体と協定を締結いたしました。

- 「日本福祉大学と東浦町との包括的な連携・協力に関する協定」
締結日：2023年7月21日
- 「日本福祉大学と阿久比町との連携・協力に関する協定」
締結日：2023年8月23日
- 「日本福祉大学と常滑市との包括連携に関する協定」
締結日：2024年2月1日

これにより、日本福祉大学は知多半島5市5町全ての自治体と連携協定を締結いたしました。それを踏まえ、本学では知多地域全域での教育・研究等の活動をより一層強化し、自治体との連携を強化していきたいと考えております。

「地域連携型研究助成制度」

「地域連携型研究助成制度」は、本学教員と地域の関係者がともに取り組む実践的研究を支援する本学独自の研究制度です。2023年度は、以下5件が採択され取り組まれました。

【2023年度 地域連携型研究助成採択一覧】

- 「外国につながる児童生徒のための学習支援に対するニーズ調査や、支援教室へのアクセスの改善（東海市、知多市を中心に）」
研究代表者：国際学部 准教授 カースティ祖父江
- 「ものづくりを通じた多世代交流と複数地域が連動した住民主体のまちづくりに関する実践的研究」
研究代表者：健康科学部 准教授 坂口大史
- 「知多地域の言語聴覚療法実施状況調査と医療・福祉・教育・保健専門職における言語聴覚士の職域認知度と連携経験」
研究代表者：教育・心理学部 教授 中嶋理香
- 「音楽アウトリーチを通じた福祉コミュニティの形成に関する研究」
研究代表者：社会福祉学部 教授 湯原悦子
- 「子どもを中心とした地域ふくし拠点づくりと支援者ネットワークに関する研究
ー美浜町における子どもの居場所支援の実践を通してー」
研究代表者：社会福祉学部 教授 野尻紀恵

研究成果報告書については、過去に採択された研究テーマも含め、下記QRコードよりご覧いただけます。



東海市太田川駅を中心とした新たな交流拠点 東海キャンパス拡張計画 ～プロジェクト実践型ワークショップで企画から運営まで体験！～

東海市では、広域的な交通の利便性の高さ、名古屋市に近い立地特性を活かしたまちづくりが進められており、本学では東海キャンパスの西側において、キャンパス拡張を予定しております。また、東海キャンパスの拡張に合わせて、美浜キャンパスに設置されている社会福祉学部の東海キャンパスへの移転を計画しております。

キャンパス拡張計画区域の広さは、約25,000㎡。現在の東海キャンパス（敷地面積7,655㎡）の約3倍です。また、拡張されるキャンパスは、「東海太田川駅西土地区画整備事業」（以下「土地区画整備事業」）の区域内となります。「土地区画整備事業」は、太田川駅を中心とした市の中心市街地として、賑わいの創出や交流人口の拡大をめざして計画され、造成工事が行われています。産業、物流拠点、広域交流拠点・住宅地区などが形成される予定で、キャンパスはその中の一画を占めることになります。

さらに、キャンパス拡張計画区域の西を通る西知多産業道路に、新たなインターチェンジ（太田IC＜仮称＞）が2027年に開通予定で、公共交通機関、自動車ともにアクセス・利便性の優れた立地としての期待が高まっています。

移転する社会福祉学部は、現在の東海キャンパスに配置されている3学部1研究科（経済学部、国際学部、看護学部、看護学研究科）と、より一層の連携を図り「ふくしの総合大学」としての教育・研究を強化します。また、これまでのキャンパスコンセプトである「産官学連携」「グローバル化」を基盤に、新たな「ふくし」「研究」「事業」「連携」を「創造するキャンパス」に生まれ変わります。



※写真は現在の東海キャンパス

知多半島で広がる協働による持続可能なまちづくり

美浜町

美浜町運動公園（陸上競技場）の開業が近づいてきました。



2024年3月時点の現況

美浜町総合計画に基づくまちづくりの一環として、美浜町運動公園整備事業が進められています。陸上競技場（日本陸上競技連盟第3種公認）の先行開業（2024年6月30日）に向けて整備が進められ、メインスタンドや青色のトラックなど、その姿が見えてきました。開業に先駆けて2024年4月より本学の授業や部活動でのテスト利用が計画されており、開業に向けた施設運用面の調整が進められていきます。

「スポーツを核としたまちづくり」を意識した機運醸成イベントが開催されました。



本学と美浜町が共同設置する「みはまスポーツまちづくり推進室」が、美浜町が掲げる「スポーツを核としたまちづくり」の機運醸成を目的に、プロ野球選手や国・地方行政関係者をお招きして、スポーツの波及効果に着目したまちづくりを議論するシンポジウムやオリンピックメダリスト（陸上）を講師にして「スポーツがあるまち」の魅力を体感する「走り方教室」を実施しました。



◀みはまスポーツ
まちづくり推進室
Instagram

美浜町運動公園 ▶
公式ホームページ



半田市

直木賞作家 澤田瞳子「わたしと半田市」特別講演会を開催



6月17日に直木賞受賞作家である澤田瞳子さんの特別講演会を本学半田キャンパスにて開催し、半田市在住者をはじめとした約250人が参加しました。本講演会は、澤田さんの母である小説家 澤田ふじ子さんが半田市出身というご縁が

あり、半田市と本学による共同事業として開催しました。

講演会後の高校生との座談会では、半田高校と半田商業高校の生徒4名が登壇し、短い時間ではありましたが高校生の視点から様々な質疑応答が行われ、時々会場内に笑い声があふれる雰囲気の良い座談会となりました。講演会の最後には、久世孝宏半田市長より澤田さんへの御礼の言葉とともに花束が贈呈されました。



大府市

大府市南中学校の福祉教育講座を開催



3月8日に大府市立大府南中学校で、同校1年生を対象とした福祉教育講座「ポッチャを通して障がいについて知ろう」が開催され、経済学部2年生の岩瀬創太郎さんが講師として登壇しました。

岩瀬さんは、自身の障がいの状況や、障がい者の思いなどを講義し、生徒は岩瀬さんの話に熱心に耳を傾けました。また、試合で使う難しい技を披露すると、「おー」という歓声とともに大きな拍手が送られました。そのあと、生徒130名が試合形式でポッチャを実際に体験しました。

この企画は、大府市と本学との包括協定に基づく事業として、大府市、大府市立南中学校、大府市社会福祉協議会、日本福祉大学の主催で今年度初めて開催されたものです。

